
プラットホームの先で

上月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラットホームの先で

【著者名】

N4560D

【作者略】

上月

【あらすじ】

茫漠とした時間の流れに、わたしはできるだけ早く、良くも悪くも、何かしらの変化が訪れるようにと願った。

「ああ、と形の整つた唇が歪んで、白い息と共にその言葉は声となつて出ってきた。一瞬、ぐつと身を硬くして、そのあとに妙な緊張を体全体に伝達させるかのように、どくりと心臓が大きく脈打つ。背中を強く押されて、よろめいた拍子に、腕いっぱいに抱えていたバレーボールが全て落ちて四方八方に転がってしまった。わたしは慌てて、ボールを拾いにいく。すると後ろから、大笑いする声が聞こえてきた。嘲笑うように、複数の重なつた笑い声は凶器となつて、わたしの心を抉る。

「全部拾つて、カゴに戻しておいてね」

わたしが所属しているバレー部の部長である歩美^{あゆみ}が、バレーボール専用の収納カゴを指差す。わたしは下唇を噛んだまま、何も言うことできなかつた。直接的に暴力を振るわれていじめより、こうして間接的に、じわりと心に毒を沁みこませるようないじめの方が、ずっと陰湿で厄介だ。そして何よりも、わたしが反抗することによって歩美を筆頭とした、同じ部員であり同級生でもある友人たちからいじめがエスカレートすることを恐れていた。

何も言い返さず、ただぐつと息さえも押し殺してわたしに飽きたのか、歩美たちは「帰ろ帰ろお」と口々に言いながら体育館を出ていった。残されたわたしは、あまりの惨めさと悲しさに、唇を震わせる。泣きそうになるのをぐつと堪えて、胃の中に落ちた鉛のようなものが体内を転がる感覚を忘れようと、せっせとボール拾いを始めた。午後に体育館を使用していたのはバレー部のみだったので、転がっているボールの範囲は広い。歩くたびに、履いているバーボールシューズの裏のゴムと床とが擦れ、キュッキュッと音を立てる。そしてその音は、深閑とした体育館内に大きく響いた。

ボールを四つ拾つては、カゴに入れる。それをずっと繰り返して

いるうちに、約二十個ほど落ちていたボールはもうほとんどカゴの中へ入れ終えた。最後の二つをカゴに入れると、ふう、とため息をつく。体育館の冷たい空気が、足の裏まで伝わってくる。指先は特にその冷たさを敏感に感じ取つて、もう既に感覚がない。電気を消されて、薄暗いことも手伝つてか、いつも以上に今日は冷え込んでるようを感じる。わたしはカゴを押して倉庫へと戻して、早足で更衣室へ向かつた。

わたしが憧れていたバレー・ボールと、今のバレー部はとてもかけ離れていた。小学校の頃にテレビで試合を見て以来、わたしはバレー・ボールの虜になつた。ボールのアタックの勢いだとか、ガードだとか、全てがかつこよく見えて、絶対に中学校に入つたらバレー部に入部しようと決めていた。しかし、時が経つていざ入部してみると、ルールをいまいち知らない人はおろか、未経験者すらほとんどいない状況で、わたしを含め、新入部員の中の数人が、長い間肩身の狭い思いをしなければならなかつた。新入部員といつても、小学校のときに地区のバレー部に入つている一年生もいて、その人たちは顧問や先輩からも優遇され、未経験者のわたしたちは何度も悔しい思いをした。けれどもやはり、器用な人や運動神経の良い人は、めきめきと上達してくるもので、ひとり、またひとりとわたしの元から離れて、一番目に上手いBチームや、その次に上手いCチームにどんどんと入つていった。わたしも負けるものかと意気込んで、毎日遅くまで練習をしたけれど、元々才能がなかつたのか、向いていないのか、全く進歩せず、ただただ友達が明るい笑顔で自分のもとから去るのを見送るばかりだった。二年生になって、今度こそはBチーム、できることならレギュラー入りを果たそうと気合いを入れてはみたものの、やはり一年生のときと同様に、そう上手くはいかなかつた。いくら頑張つても進歩しないわたしを、同級生の部員も最初は励ましてくれていたのだが、やはり練習試合などで足を引つ張つてしまふ。そして、そのたびに、段々と部員の態度が冷たく

なつていぐのに、嫌でも気付かされた。最終的に、それはいじめと化して、三年生の先輩が引退したのをいいことに、日に日に陰湿になつていった。後輩も最初はためらいながらもわたしと一緒に後片付けをしていたものの、歩美や副部長の明奈にこつぴぢく叱られて以来、全く片付けをしてくれなくなつた。

着替えを終えて、はあ、と深く息を吐く。入部して少ししてから買った、茨木東中学校のバー部のロゴが入った、練習用の長袖のシャツを見つめる。更衣室はわたし以外には誰もいない。片足だけに体重を掛けると、床の木の板が軋んだように小さな音を立てた。情けない、悔しい。この二つの言葉ばかりが頭の中でぐるぐると円を描く。木の匂いがする、古臭い棚に凭れかかって、肩の力を抜いた。窓から傾いた太陽のやわらかな光が差し込んでいて、空中を漂つてゐる埃がきらきらと宝石のように光っている。しんとした、あたたかな雰囲気がまた心地よい。誰もいない空間が、今のわたしにとっては一番の憩いの場だった。

そういうえば、今日は暗くなるにつれていつもより一段と冷え込むと、天気予報で言つていた気がする。

わたしはエナメルバッグに、練習着を乱雑に突っ込むと、それを肩に掛け、更衣室を出た。外に出た瞬間、冷たい風が体に体当たりしてきて、体の芯がいつきに冷えてしまつたような気がした。空の半分くらいが、もう暗くなつてきている。寒さを少しでも凌ぐうと、マフラーをぐつと首に巻きつけた。

校庭を眺めながら、やはり冬には色がないなと思った。淡いというよりも薄い感じがする。すっかり禿げ頭になつてしまつた、校庭を囲むように並んでいる桜の木を見つめて、茫漠とした時間の流れに、わたしはできるだけ早く、良くも悪くも、何かしらの変化が訪れるようになると願つた。

感情

雪がちぢりついてきた。元旦に見た、近所の神社でやつていた焚き火で、たなびく煙から逃げるように舞つていた灰にそつくりだ。ただ、雪は灰と違つて、上へは上らず、下へと落ちて、知らない間に消えてしまつ。なんとも儂い存在ではあるが、わたしの住んでいるところのように、滅多に雪が降らない土地では、特に小さな子ども達に重宝されている、とても価値の高い存在だ。それに比べてわたしは、バレー部の中ではただの灰塵のような気がする。

わたしは部屋の窓にへばりついて、ガラスの曇りを拭いながら外を眺める。何度か、雪が窓に落ちて、そのままじわりと溶けて水になることもあつた。その溶けた雪が、ガラスを伝つて窓枠に溜まる。せつかぐの休日だというのに、また明日から放課後は部活動になければいけないと考えると憂鬱になつてしまつ。ずっと胃が重たくて、本当に鉛玉が中で転がつているような気がして仕方がない。出てくるのはため息ばかりで、あまりの世の中の不条理さにわけもわからず叫びだしたくなる瞬間さえある。学校が嫌いなら燃やしてしまえばいい。部活が嫌いなら潰してしまえばいい。そう考へてはみるもの、気は楽な方向には向かず、最終的にはそもそも自分が消えてしまえば一番いいのだという考へにたどり着いてしまう。感情なんものがわたしの中からなくなつてしまつのも、またそれはそれでありかもしれないなどとも思う。

ぼうつと、何を見るわけでもなく窓の外の景色をまた眺める。いつもと変わらない町並みの中に、雪だけが少しだけ不恰好にぱらついている。雪が降るほど冷え込んでいるのに、近所に住む保育園の年長さんくらいの子どもたちが、家の周りで楽しそうにはしゃいでいるのが見えた。母親に無理やり着込まされたのだろう、元の体の細さに比例していないくらい厚着をしてこいる。

子どもたちは、自分の意見を押し付けあうよがやこがやこと

言い合い、けれど結局はリーダー格のような女の子が何か意見を言って、みんなそれに納得したように遊びを始めた。あれくらいの年のは、本当に幸せだと思う。お互い他人を評価し合うこともなく、皆が皆同じであると認識し、そして誰かひとりが少し間違ったことを言つても、引くことなど一切せず、何かしら直球で言葉を返す。喧嘩をしてもすぐに仲直りして、何のわだかまりもなく、また仲良く一緒に遊ぶ。しかしそれは、プライドや周りの目を気にし始めたころから次第にできなくなつていつてしまふ。相手に対する偏見や差別が、たつたひとつずつ言動すら許せなくなつてしまふのだ。きっと、わたしもそのひとりであり、そうやって差別されているひとりでもあるのだと思うと、悲しくなつた。

窓のほんの少しの隙間から入つてくる風に、鼻が赤くなつていくのが、鼻先の冷たい感覚でわかつた。わたしはようやく窓から顔を離すと、そのまま座り込んでいたベッドに仰向けに倒れた。しんとした、温度の冷えとはまた違う、冷たい空気が流れているのがわかる。天井までの距離は遠くて、腕を伸ばしても到底届きそうにない。真つ白な天井は、明りをひとつも点けていないせいか薄暗く、若干灰色にも見える。寝返りをうつて、昨晩枕元に充電器を差し込んだまま置いておいた携帯電話を手に取る。着信は一件もない。もちろん、メールもだ。てらてらと光る液晶画面の脳まозさが、ぐつと目の奥を痛いくらいに刺激した。四時五十六分と表示された画面を見て、一日ももうそろそろ終わりだな、と頭をもたげて長嘆する。やはり時間は悪意を持つて、この柔軟な空間をすぐに流してしまうのだ。

「春美」

「こんこん、ヒヂアのノックの音と同時に、母さんの声が聞こえてきた。

別に怪しいことをしていたというわけでもないのに、わたしは慌ててベッドから飛び上ると、姿勢を正して、ドア越しに「なに」と問いかける。声がいつももの調子があとから確かめて、別に大丈夫だな、と確認を終えると、ばれないようにほつと息をつく。なんと

なく、あれほど頑張っていた部活に、ここにのこりずっと嫌気が差しているといふことが、母親に対して後ろめたい気がして仕方ないのだ。

「もうそろそろ夕飯の支度するから、春も手伝つて」「はいはあい」

わたしは適当な返事をすると、携帯電話を閉じて、再び枕元に戻す。耳を澄ますと、母さんが階段を下りていく音が聞こえた。部屋を出る前にもう一度窓の方に寄つて、今頃子どもたちはどうしているのだろうと外を覗き見る。すると、もう家路につく時間になつたのだろう、子どもたちは遊ぶのをやめて、手を振りながらそれぞれの家への道を歩いているところだつた。ふと、女の子のかたまりがあるなと思つてそちらに目をやると、家が余程近いのか、三人の小さな女の子が手袋もはめずに、仲良く手をつないで歩いていた。

- - プラットホームの先で 2 (了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4560d/>

プラットホームの先で

2010年12月31日02時28分発行